

# 日本の医師を看護婦を

## 10カ国の医療団、すでに活躍中なのに

内戦と飢餓に見舞われているソマリア難民を救うため、学生や社会人で組織したボランティア団体「ジャパン・エマーゲンシー・チーム」(本部・東京都港区、登録会員約四百人)が昨年、ソマリア入りした。現地には西欧各国から民間医療団が来ていたが、日本からはゼロ。同チームから「現地の難民に、日本から一刻も早く医師と看護婦を送ってほしい」と言われたと日本の本部に緊急支援の連絡が入った。湾岸戦争から二年たち、イラクは再び戦火に包まれているが、この二年間、民間ベースの国際貢献が叫ばれながら、日本の支援態勢はスタートが遅い。

### 現地入りの竹友さんから便り

ジャパン・エマーゲンシー・チーム(日本緊急援助隊)は六年前の米ロサンゼルス地震以来、ボランティア活動をしている。ソマリア難民救援では昨年十二月三十日、同チームの竹友有二さん(三がケニア経由で南部の都市キスマヨに入り、他国から来ているボランティアと合流、四日間に見わたって食糧配給などをしていた)が、この二年間、民間ベースの国際貢献が叫ばれながら、日本の支援態勢はスタートが遅い。

英国、スウェーデンなど約十カ国から来た百人近い医療団が食糧配給チームとともに四十カ所近い村を巡回している。日本からはだれも来ていない。なぜ日本から医師と看護婦が来ないのかと聞かれ、情けない思いをした」と本部にレポートしてきた。

国際電話で竹友さんは「近くの村を回ったところ、マラリアで苦しんでいる人や手当てを受けていない人が人がたくさんいる。現地の人たちにとって、いま一番必要なのは医師と看護婦だ」と訴えた。

これを受けて、日本で医師と看護婦集めに奔走している同チームの中央大学四年の西正文さんは「数人の医師や看護婦に聞いた



ソマリア難民を救うボランティア集めに走る西さん

を行っている。「四百人の登録会員では緊急時の対応が難しい。千人の登録会員がほしい」と会員獲得にも力を入れ始めた。

一方、アジア医師連絡協議会(AMDA)はソマリア難民を受け入れているケニアやジブチ共和国へ向けて、医師二人の第一陣が今月二十三日に日本をたつ。二月上旬にいったん帰国し、現状報告のあと継続して医師を送る。第二陣以降にソマリアへも行く。アフリカ教育基金の会も近く、ソマリアで難民用の学校建設に着手する。

同協議会の事務局を引き受けている開業医、小林米幸さん(四)は「今回、行くのは大学病院などに勤める医師たちだ。個人的に許可を得て行くわけだが、ボランティア休暇が制度的に保証されていないと、いくら行きたくても行けない」と制度面の条件整備が不可欠だと話している。

ジャパン・エマーゲンシー・チームの本部の電話は03・3435・1470。